

『英草紙』の素材選択から見る庭鐘の創作意識

——『英草紙』と中国白話小説『醒世恒言』との関係から——

ニン セイメイ
任 清梅

一. はじめに

『英草紙』は読本の嚆矢とされ、寛延二年（1749）に出版され、五巻にわたり、九篇の短篇小説を収めている。その中、既に周知のように、八篇は短編白話小説集「三言」の作品を翻案したものである。従来、『英草紙』の白話との関係について、多くは「三言」というトータルな面から論じられていた。

しかし、この八篇は「三言」の各「言」を典拠としているのではなく、『喻世明言』と『警世通言』の「二言」だけから典拠を取っており、第三「言」の『醒世恒言』はまったく利用されていない。これはなぜであろう。この問題に関して、従来の研究ではほとんど触れていないのである。

実はこれは都賀庭鐘の創作意識と彼の「三言」に対する認識と関わっている重要な問題である。本発表はこの問題について検討するものである。

二. 「三言」と『英草紙』

「三言」は、明の憑夢龍が編著した短篇白話小説集『喻世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』のことである。その出版年次はそれぞれ『喻世明言』が天啓一年（1621）～天啓四年（1624）、『警世通言』が天啓四年（1624）、『醒世恒言』が天啓七年（1627）である^①。

『英草紙』は作者の都賀庭鐘の読本三部作『英草紙』（1749年刊）、『繁々野話』（1766年刊）、『莠句冊』（1786年刊）の第一部である。『英草紙』について、日野龍夫氏は「人間への洞察に富んだ思想性、人物の性格や心理的的確な描写、

表 1

『英草紙』の各篇		典拠となる『諭世明言』の各巻	典拠となる『警世通言』の各巻
第一篇	後醍醐の帝三たび藤房の諫めを折く話		卷 3 王安石三難蘇学士
第二篇	馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話	卷 27 金玉奴棒打薄情郎	
第三篇	豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話		卷 1 俞伯牙摔琴謝知音
第四篇	黒川源太主山に入ッて道を得たる話		卷 2 莊子休鼓盆成大道
第五篇	紀任重陰司に至り滞獄を断くる話	卷 31 閻陰司司馬貌断獄	
第六篇	三人の妓女趣を異にして各名を成す話	卷 12 「衆名妓春風弔柳七」の一部	
第七篇	楠弾正左衛門不戦して敵を制する話	「三言」との関わりが見られない。	
第八篇	白水翁が売卜直言奇を示す話		卷 13 三現身包龍図断冤
第九篇	高武蔵野婢を出だして媒をなす話	卷 9 裴晉公義返原配	

重厚な文語の文体、緻密な時代考証等々、末期浮世草子とはまったく異なるすぐれた文学性を獲得するに至っており、この作品によって読本なる新しい小説の様式が切り開かれた。」^②と高く評価している。

『英草紙』の各話と『諭世明言』『警世通言』の対応関係は表 1 のようである。

この表に見られるように、『英草紙』は『諭世明言』と『警世通言』からそれぞれ四篇を取り、『醒世恒言』は全く典拠としていないことが分かった。

三. 「三言」が日本に伝来した時期と『醒世恒言』の日本での流行

(一) 「三言」が日本に伝来した時期

「三言」はいつ日本に伝わってきたのであろう。

幕府の『御文庫目録』によると、『諭世明言』は寛文八年（1668）に入庫し、

「諭世明言一名重刻増補古今小説 二四巻 明刊 六冊」とあり、『醒世恒言』は承応二年（1653）に入庫し、「醒世恒言 四〇巻 明刊 葉敬池 十六冊」のように記している^③。

また、大庭修氏の『舶載目録 附解題』によると、『警世通言』は寛保三（1743）年に亥十四番の船で日本にもたらされたという^④。

なお、中村幸彦氏の考察^⑤によると、享保二十（1736）年に亡くなった田中大観の「大観随筆」には、「嘗観ニ小説名警世通言一、……」という記述が見られ、このことから、『警世通言』は既に1736年以前に日本に伝わったと推測される。

以上「三言」の日本に伝来した時期について考察したが、『醒世恒言』は1653年、『諭世明言』は1668年、『警世通言』は1736年以前に、日本に伝わっていたのであり、全部『英草紙』の発表された1749年より前であった。その中、『醒世恒言』が一番早く、『英草紙』の出版された百年ほど前であった。

（二）『醒世恒言』の日本での流行

「三言」が日本に伝わると、すぐに多くの翻訳がなされるようになった。特に『醒世恒言』の翻訳が盛んであった。

岡白駒が訳した『小説精言』（1743年）は、四巻からなっているが、四巻全て『醒世恒言』の中の作品である。それはそれぞれ、巻33「十五貫劇言成巧禍」、巻8「喬太守乱点鴛鴦譜」、巻21「張淑兒巧知脱楊生」、と巻9「陳多寿生死夫妻」である。

同じく岡白駒の『小説奇言』（1753年）は、五巻のうち二巻は、『醒世恒言』の巻10「劉小官雌雄兄弟」と巻7「錢秀才錯占鳳凰隣」を訳したものである。

また、近世白話小説翻案集を見てみても、「三言」のうちでは、やはり『醒世恒言』に訓訳を施すものが多く見られる。

岡白駒の弟子の西田維則と言われる贅世子が訳した『通俗赤縄奇縁』（1766年）は四巻四冊からなり、『醒世恒言』の巻3「売油翁独占花魁」を四章に分

けて訳した作品である。

また、石川雅望が翻訳した『通俗醒世恒言』（1789年）の四巻五冊は全て『醒世恒言』から選んだものである。それはそれぞれ巻6「小水湾天狐詒書」、巻28「呉衙内隣船赴約」、巻34「一文銭小隙造奇冤」、巻18「施潤沢灘闕遭友」である。

なお、訳者不明の『通俗繡像親裁綺史』（1800年）は『醒世恒言』の巻3「売油翁独占花魁」を訳している。

このように見てみると、『英草紙』の前にも、後にも、『醒世恒言』が日本で非常に流行っていたことが分かる。

四．都賀庭鐘が『醒世恒言』を避けた理由

『醒世恒言』がこれほど流行していたにも関わらず、都賀庭鐘がこれにまったく触れていなかったのはなぜであろう。その理由は、二つあると考えられる。一つは新しさの追求であり、もう一つは『醒世恒言』の内容が彼の気に入らなかったことであると思われる。

（一）新しさの追求

都賀庭鐘は1743年に出版された『小説精言』を意識して、敢て岡白駒の使っていた『醒世恒言』を避けていたのではないかと考えられる。『英草紙』は、今までの浮世草子と違って、新鮮な味わいを漂わせている。その新しさを貫徹するため、素材の選択の面においても、彼がわざと流行していた『醒世恒言』を避けたのも道理に適ったことであると思われる。

が、『醒世恒言』は40篇もあり、岡白駒によって取り上げられた作品の数はそれほど多くはなかった。なぜ都賀庭鐘は岡白駒が取り上げていなかった作品にも関心を示さなかったのであろう。これは『醒世恒言』の内容と関係あると思われる。以下「三言」の内容を検討し、『醒世恒言』と『喻世明言』『警世通言』の違いを考えてみたい。

(二) 分類から見る『醒世恒言』と『喻世明言』『警世通言』の違い

魯迅氏が『中国小説史略』において、呉牧自の話本の分類方法を挙げている^⑥。呉自牧氏は、話本を四種類に分け、小説、説経、歴史の話、合声を演じる（座に出された種を即興に詩や詞を作ること）との四つの分類をしている。これをもっと詳しく分類すれば、小説には、煙粉、怪異、伝奇、公案、俠義、出世などの種類があり、説経には仏教、道教の二種類を説くものがあるという。

孫楷第氏は『中国通俗小説書目』の中で、小説をもっと詳しく分類している^⑦。煙粉小説を人情、狂邪（花柳の巷での遊興）、才子佳人、英雄の男女、淫猥など五つに分けている。表2は「三言」の各篇の内容を、呉自牧氏と孫楷第氏の分類を参考にしながら、義のある話、淫欲、友情、才子佳人など20分類に分け、「三言」の内容を分析したものである。

この表を分析してみると、以下のようなことが分かる。

1. 『喻世明言』は各種類の話本をバランスをよく取っている。『警世通言』になると、怪異的な話（妖怪と亡霊）が数多くなってきて、そのバランスが少し崩れ始めたが、それほどではない。
2. しかし、『醒世恒言』となると、「俠義」、「友情」、「出世」、「再会」、「怪異」、「歴史」などの話は全く見られず、その代わりに「淫欲」の話（5篇ある。が、『喻世明言』には1篇、『警世通言』には2篇だけ）や、「仙人になる」話（6篇ある。が、『喻世明言』には3篇、『警世通言』には2篇だけ）、「英雄の男女」^⑧の話（6篇ある。が、『喻世明言』には2篇、『警世通言』には1篇だけ）が数多く見られる。この三種類の話は確実に前の「二言」より増えている。

また、各「言」の話の時代を見てみると、明の時代の話の数は『喻世明言』には5話だけあり、『警世通言』には10話あり、『醒世恒言』には15話^⑨あることが分かる。即ち、憑夢龍が集めた宋元時代の話本は「三言」を編集するに

表 2

分類基準	喻世明言	警世通言	醒世恒言
義のある行動 (8 篇)	3 篇 (巻 1、6、9)	2 篇 (巻 18、21)	3 篇 (巻 1、17、35)
一途な女、薄情な男 (3 篇)	1 篇 (巻 27)	2 篇 (巻 32、34)	
薄情な女 (1 篇)		1 篇 (巻 2)	
一途な女性 (男が薄情ではない) (3 篇)			3 篇 (巻 9、14、19)
花柳での遊興 (2 篇)	1 篇 (巻 12)		1 篇 (巻 3)
淫欲 (8 篇)	1 篇 (巻 3)	2 篇 (巻 33、38)	5 篇 (巻 15、16、23、24、39)
友情 (4 篇)	3 篇 (巻 7、8、16)	1 篇 (巻 1)	
才子佳人 (8 篇)	1 篇 (巻 23)	4 篇 (巻 23、24、26、29)	3 篇 (巻 7、28、32)
説教 1—仏教 (6 篇)	4 篇 (巻 4、29、30、37)	1 篇 (巻 7)	1 篇 (巻 12)
説教 2—道教 (仙人になる話) (11 篇)	3 篇 (巻 13、14、33)	2 篇 (巻 39、40)	6 篇 (巻 4、22、26、37、38、40)
出世 (6 篇)	4 篇 (巻 5、11、15、21)	2 篇 (巻 6、17)	
再会 (5 篇)	2 篇 (巻 17、18)	3 篇 (巻 11、12、22)	
怪異 (亡霊、妖怪、妖術) (12 篇)	3 篇 (巻 19、20、24)	9 篇 (巻 19、27、28、36、8、10、14、16、30)	
勧善懲悪 (12 篇)	3 篇 (巻 34、22、35)	4 篇 (巻 3、5、20、25)	5 篇 (巻 2、5、6、18、30)
伝奇 (6 篇)	2 篇 (巻 25、32)	2 篇 (巻 4、9)	2 篇 (巻 25、31)
英雄の男女 (9 篇) ^⑧	2 篇 (巻 28、38)	1 篇 (巻 31)	6 篇 (巻 10、11、20、21、29、36)
俠義 (1 篇)	1 篇 (巻 36)		
裁判 (12 篇)	4 篇 (巻 2、10、26、31)	4 篇 (巻 13、15、35、37)	4 篇 (巻 13、27、33、34)
歴史 (2 篇)	2 篇 (巻 39、40)		
従来結婚への批判 (1 篇)			1 篇 (巻 8)

あたって、足りなかったのである。そこで、『醒世恒言』において、当時である明代の話が前の「二言」より多く取り入れられた。「銭秀才錯占鳳凰儔」のような「才子佳人」の話や、「陳多寿生死夫妻」のような一途な女性の話や、「張廷秀逃生救父」「張淑児巧智脱楊生」のような「英雄男女」の話、「赫大卿遺恨鴛鴦縈」「陸五漢硬留合色鞋」のような「淫欲」の話などがそれである。

もう一人の通俗白話小説の編著者である凌夢初が『拍案驚奇・序』の中で、「独龍子猶氏所輯『喻世』等諸言、頗存雅道、…而宋元旧種、亦被搜括殆尽。…不知一二遺者、溝中之断、蕪略不足陳已」^⑩（ただ龍子猶氏の編集した『喻世』などの作品は、頗る雅が存し…しかし、宋元の古い話本は、すでに使われ尽している。…その中一つ二つ漏れていた種も溝の粕であり、取るに値するものではない）と述べている。凌夢初の言っているように、彼の著した「二拍」に比べると、『喻世明言』などの作品には随分「雅」が存在している。これを見抜いた都賀庭鐘はさすがに「二拍」に関心を示さなかったのである。

が、『拍案驚奇』と同年に出版された『醒世恒言』も同じような問題を抱えていたと思われる。『喻世明言』や『警世通言』と比べると、『醒世恒言』には「雅」の要素が含まれる話が少なく、世俗的な「俗」性の強い話が多くなっている。「淫欲」の話はもちろんそうであるが、「勸善懲惡」や「英雄男女」の話も多くは普通の庶民の生活を描いた「俗」の話であった。また、巻13「勘皮靴單証二郎神」、巻27「李玉英獄中訴冤卷」、33「十五貫劇言成巧禍卷」、34「一文錢小隙造奇冤」等の裁判の話を見てみると、淫欲で起こった裁判、継母が子供を虐めて殺し、起こした裁判や、見知らぬ人の死体を利用し、冤罪を引き起こした裁判が多く見られ、社会の暗い面を暴露している作品が多い。

アメリカの有名な漢学者 Patrick Hannan は『The Chinese Vernacular Story』（『中国白話小説』）の中で^⑪、『醒世恒言』は前の「二言」（『喻世明言』と『警世通言』）と大きく違っていると言っている。その原因は「ある人」が『醒世恒言』の大部分の作品を執筆したからであり、また、この「ある人」とは憑夢龍の協力者で、「石點頭」の作者の「浪仙」とであると指摘している。Hannan

氏は、作者が異なっている点に『醒世恒言』と前の「二言」の相違の原因を見ている。が、前に述べたごとく、内容の面から言っても、『醒世恒言』が前の「二言」と違っていることは明らかである。

文人としての都賀庭鐘は、「雅」の要素が薄く、「俗」性の高かった『醒世恒言』に関心を示さなかったのも当然のように思われる。彼の選択した作品を見てみるとわかるように、主人公はほとんど文人である。であるから、文人の登場が少なく、普通の庶民が主人公の大部分を占めた『醒世恒言』はあまり彼の興味をそそらなかったであろう。

五. 都賀庭鐘の創作意識

(一) 素材の選択を左右した都賀庭鐘の特異な夫婦観と女性観

庭鐘は『警世通言』と『喻世明言』から一篇ずつ「薄情」の話を取り、『英草紙』の第二篇「黒川源太主山に入ッて道を得たる話」と第四篇「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」に書き変え、また『警世通言』の「裁判」の話「三現身包龍図断冤」を取り、第八篇「白水翁が売卜直言奇を示す話」に翻案した。

「黒川源太主山に入ッて道を得たる話」については、ところどころ庭鐘は原典を変えているが、彼の言おうとしていることは原典とあまり変わらない。それは女性がいかに非情であるかである。夫が死んで、さほど経っていないのに、深谷はその以前の貞潔や見栄張りを捨て、ほかの男性に惚れてしまう。しかも、男性から誘われるのではなく、自分のほうから積極的に男性と一緒にしようとする。男性の病気を治すために、死後二十日間余りの夫の脳味噌を出そうとしている。

「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」は、薄情な男を主人公にしている。この一篇も原典のテーマと変わっていない。乞食出身の妻の身分を嫌がり、身分の高い人の娘を嫁にしたいと、赴任中に妻を河に沈めてしまったという非情な夫を描き出し、夫婦というものはどうであるべきかと考えさせる作品である。

「白水翁が売卜直言奇を示す話」の原典は裁判の話の分類に入れられたが、翻案は、裁判の色が薄くなっている¹²。そこにあるのはやはり占い師の占いを利用して、自分の夫を殺し、姦通した男と夫婦になった女性の非情であり、残酷さであった。ほかの男と一緒にするために自分の夫を殺した小瀬は、夫の脳味噌を取ってほかの男性の病気を治そうとする深谷と同じく、非情で、残酷すぎる。

この三つの話は全部夫婦関係の話であり、妻か夫か非情な話であった。夫婦関係があまり良くない作品がどうも都賀の注目を引いてしまうようである。そこに潜んでいるのは、彼の非情な女と非情な男への揶揄風刺と夫婦関係への不信であろう。

彼は普通の女性に対して、いいイメージを持っていないようである。中村幸彦氏は、「庭鐘の二十七篇の小説の中で、普通の女性はみんな姦通するとか、悪質の一つもしくはいくつかもっている女性であり、真っ当な女性は遊女かお化けかである。」と言っている¹³。

『英草紙』の中に出てきた遊女の話は「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」である。これは『喻世明言』の巻12「衆名妓春風弔柳七」と『青瑣高議』の「王幼玉記」を参考にして翻案したものである。

都賀庭鐘はその三人の姉妹遊女にそれぞれ特徴を持たせている。姉の都産は広瀬という男を思い、死んだ後、自分の髪を広瀬のところに送り、その家の祖先の墓のそばに埋めてもらった一途な女性であった。妹の檜垣は身請けされ、半年も経ていないうちに仮病を使って逃げ出し、また遊女を勤め、遊女の道を貫いた人である。三女の鄙路は自分のために死んだ男の仇討をした後、姿を消してしまった俠気な女性である。この三人の遊女は非情で残忍な人妻の深谷や小瀬と鮮明な対比をなしている。

中村幸彦氏の言っているように、都賀庭鐘にとって、まともな女性の中に遊女がいて、普通の女性はいなかった。

「三言」の中には、夫婦が離れ離れになったが、互いを思い、妻が固く操を

守った話が数少なくなかった。また、『醒世恒言』の中には、難病の夫と離縁しなく、心を込めて面倒を見、夫が毒を飲んでいるのを見て、自分も飲んでしまうような一途な女性（巻9「陳多寿生死夫妻」）や、夫の将来を考え、自分は苦勞して夫を出世させた女性の話（巻19「白玉娘忍苦成夫」）がある。このような完璧な夫婦関係の話や、一途な普通の女性の話を都賀庭鐘が一篇も取ってなかったのは彼の特異な女性観と夫婦観によったものであろう。彼のこのような考えが素材の選択に当たり、確実に働いていたのである。

（二）都賀庭鐘の政治と歴史へ寄せる関心

庭鐘の政治と歴史へ寄せる関心は第一篇の「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」や第三篇の「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」と第五篇の「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」に見られる。

- （1）「後醍醐の帝三たび藤房の諫めを折く話」の粉本は『警世通言』の「王安石三難蘇学士」である。「王安石三難蘇学士」は学問に軽薄な態度を取る蘇東坡に対して、「人が第一に良いことは謙遜であること」というように人間の教育論を述べているが、「後醍醐」は、国をどう治めるべきかの治国論の話になっている。

藤房は「帝此の時太平に志怠り給ひ、馬場殿を建て逸遊度なく、女謁盛んに行はれ、朝野怨を含むもの甚だ多し。近比仏教を信じ給ひ、僧徒また禁宮に出入するものすくなからず。」というありさまを見て、後醍醐を諫めたが、耳を貸してくれなかった。

一匹の竜馬が後醍醐に献上されたが、竜馬が出るのは初めてのことなので、帝はその吉凶を聞く。他の大臣はみんな帝の機嫌を取り、「吉」と言うが、藤原はこの馬は良いことに役立たないと言って、「今大乱の後、民費え人苦みて、天下いまだ安からざるに、人主の誤を正すべき執政もなく、群臣言に阿つて、

国の危きことを申さず、大内裏を造り、馬場殿を建て、民に課役をかけ、宸襟を休め奉りし功臣を賞し給へども、恩賞其の功にあらず、忠功空しく怨を含むもの多し。」と切に諫めた。

最後に彼は「治世の期、吁やんぬるかな。今主上智は奢に用ひ、弁は非を覆ふに足る。」とついに官をやめ、隠遁した。

この三か所の引用文から、都賀庭鐘の後醍醐の建武政治への批判が窺える。後醍醐は一国の統治者として、仏教に耽って、民の苦しみを理解せず、豪奢に大内裏を建て、奸臣の諂う言葉に耳を傾け、功のある忠臣への賞が適正ではないことなどいろいろと致命的な弊害を抱えている。これらが建武政治の失敗に繋がっていたと庭鐘はこの一篇で言いたかったのであろう。^⑭

原典は政治論歴史論ではなかったが、菊の花が落ちることもあるのを知らないところを、藤原の「逃水」を知らないことと書き換えるのに都合がよかったのである。また、学問の「三難」を忠臣の諫めを「三度折く」に変えようとしている意欲から都賀庭鐘の政治への関心が伺える。

が、文中に「八駿」や「沈魚落雁」の学問的な見せびらかしは「術学」^⑮の一面もあり、文章の主題を散漫にしてしまったようにも感じられる。

- (2)「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」は「兪伯牙摔琴謝知音」の大筋を殆どそのままに翻案しているが、文章の初めで、豊原が追放された後醍醐天皇のことを思い、鳳管を吹くと、久しぶりにいい音色が出た。彼は「近頃主上聖運を開かせ給ふことあるべし」と考え、都へ行く途中、北条氏が滅び、後醍醐天皇が配所から脱け出したことを知った。その後、後醍醐天皇は再び帝位に付き、建武中興の公家一統の天下となった。ここでまず時代を原典の春秋時代を後醍醐天皇の時代に変えて、鳳管の音色を聞いて「国の盛」を知るという不思議なところを描きだした。これは原典には見られなかったところである。

その次のストーリーの発展は、琴についての長い説明、兼秋と時陰が知音になって再会を約束することはほぼ原典のままであった。最後のところに「主上御位に復し給ひてより、仮初御遊琵琶箏などを弾じさせ給ふにも、燕^{はで}なる曲のみ造らんと望ませ給ひて、ことしげき世を治め給ふべき君にあらず。是古より伝へいふ、桑間濮上の音起りて、国亡びしといふも、此の心なり。久しからずして、都もまた一変すべし」とのように述べている。これも原典には見られなかったところである。

後醍醐天皇がみだらで派手な曲を望んでいるところから、彼を難しい現在を治められる統治者ではないと断言している。そして、古くから言われてきた桑間濮上の音が流行して国が減んだ話は現在と同じで、間もなく、都もまた変動することを予測し、音から「国の衰」を聞き取る。

最初の時代設定のところから、都賀庭鐘が後醍醐天皇の建武中興を意識していることが窺える。が、物語の展開上において、原典の友情の話をはほぼそのままに翻案し、最初と最後の部分だけで、国の政治、後醍醐の治国について触れている。文章の大部分は兼秋と時陰の知合い、琴についての説明、約束した再会の時に、時陰が既に死んでいるのを知って、兼秋が悲しんで琴を切ってしまったような筋などによって占められている。ここには、原典の友情論から政治論・治国論へと変換した時に生じた牽強附会があったと思われる。タイトルの「音を聞いて国の盛衰を知る」から見れば、「国の盛衰」に作品の重きを置くべきであったが、友情の話と琴についての学問的な見せびらかしが絡み合い、政治論^⑬が弱まってしまったようにも思われる。

- (3) 第五篇「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」の粉本は『喩世明言』の「閻陰司司馬貌断獄」である。原典は不遇の文人司馬重湘が地獄に連れて行かれ、『漢楚軍談』の人物を『三国志演義』の人物に転生させたことによって、三百年も解決しなかった事件を解決した。時代を超えて、歴史の人物を再生させるこの発想は、庭鐘に刺激を与え、義経などの

『源平盛衰記』の人物を『太平記』に転生させ^⑰、中国の歴史上の人物をうまく日本の歴史上の人物に置き換え当てはめることができたのである。

主人公の紀任重は司馬重湘と同じく、学才ありながら、不遇な文人である。地獄に連れて行かれ、百年あまり解決できなかった訴訟を解決した。彼は、安德帝の二位尼に対する訴え、義経・範頼が頼朝・大江広元に対しての訴え、畠山重忠が北条時政・北条政子に対しての訴えを公正に裁き、安德帝が二位尼によって入水させられ、死んだのだと断じ、安德帝を阿野康子、二位尼を西園寺実兼の娘と転生させる。また、義経の死が兄頼朝の狭量によることと断じ、義経を新田義貞、頼朝を護良親王、範頼を楠正成、広元を円心へと転生させる。重忠は功あって罪全くなり、またその文武二道に達した為政の器があるため、足利高氏へと転生する。時政は功臣を謀り殺したことによって、北条高時に転生し、来世一家滅ぶと裁かれ、政子は重忠を謀り殺した罪で、民部卿の局に転生し、一生志を得ない来世と裁かれた。

原典では、『漢楚軍談』の人物を『三国志演義』の人物に再生させるところに、作者の歴史に対する独特の見解が見られるが、そこに日本の歴史を当てはめ、『源平盛衰記』の人物を『太平記』に再生させるところから庭鐘の歴史に対する独特な見解も伺える。彼はまず中国の漢の時代の人物を日本の源平時代の人物に当てはめ、そして、裁判を通して、源平時代の人を南北朝の時代の人に転生させる。その当てはめ方と公正な裁判から、彼の歴史に対する関心、一種の歴史を正そうとする考えが見えてくる。

文人としての都賀庭鐘は政治への批判や、自分の歴史観を陳述する際に当って、素材の選択をも慎重に行い、原典に文人が出ている作品を選んでいる。彼の選んだ蘇学士、俞伯牙、司馬重湘の三人は文人であり、また蘇学士と俞伯牙は歴史的人物で、朝廷に仕える身であり、司馬重湘は官職の売買の社会に不満を抱きながらも、出世できない文人である。

しかし、『醒世恒言』の中には政治と歴史と関係のある作品は少なく、隋陽

帝と金海陵のような歴史的人物が出てきたが、これは二人がどのように淫欲を極めていたかの話であった。また、『醒世恒言』の主人公は普通の庶民が多く、文人が登場した場合があっても、「才子佳人」のような男女の愛の話や（巻7「銭秀才錯占鳳凰儔」、巻28「呉衙内隣船赴約」、巻32「黄秀才得靈玉馬墮」など）、「説教2- 仙人になる話」（巻40「馬当神風送騰王閣」）などに限られる。これらは庭鐘の政治と歴史観の開陳を発揮するのに全く向かない作品である。

（三）義への追及

『英草紙・序』に、「此の書義気の重き所を述ぶれば、…これより義に本づき義にすすむ事ありて、半夜の鐘声深更を告ぐるの助とならんこと、近路行者・千里浪子の素心なる哉。」と義気が大事であり、行動が義に基づき、義に志す事を自分の本心であると述べている。

「義」を『日本国語大辞典』で調べると、七つの意味が載せられているが、「五常（仁・義・礼・智・信）の一つ。他人に対して守るべき正しい道。物事の道理にかなっていること。」という意味の「義」が庭鐘の言いたかった「義」であろう。

『英草紙』において、「義」が一番強調されているのは第九篇の「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」である。これは『諭世明言』の巻9「裴晉公義還原配」を翻案したものであり、高武蔵守師直が召使の勝子を婚約者の額田次郎左衛門の元に返し、しかも二人のために、結婚式を準備し、額田次郎左衛門を助け、彼を出世させた話である。粗筋は粉本と少し違うところもあるが、大体は原典の筋に即している。そこから、他人の善事に助成する高師直の広い心と道義が読み取れる。高師直が「婢を出だして媒をなすこと」は義に基づいたことである。

「後醍醐」では、ほかの大臣が後醍醐天皇の機嫌を取っているが、藤房は臣下として「義」を果たし、天皇の誤りを正すべく、何度も天皇の不快を買い、諫めたのであった。藤原の身における「義」は帝に対して「忠」を尽くすこと

である。

また、1の「都賀庭鐘の特異な夫婦観と女性観」の中で述べたが、庭鐘の描いた夫婦はどちらかが非情であり、夫婦の義と信が守られた夫婦関係ではなかった。反面的な角度からではあるが、読者の反響を呼び、本当の夫婦の「義」とはどうであるべきかと考えさせる。

彼は人間としての道義、臣が君に対する「義」、夫婦の義などいくつかの面から義に基づき、義にすすむことは何であろうかと追及していた。

六. まとめ

「三言」の中で、「雅」の話が多く見られる『喻世明言』と『警世通言』から素材を選び、「俗」の話が多い『醒世恒言』からは何も選択しなかったことから、都賀庭鐘が「三言」に求めようとしたものが見えてきた。それは通俗話の中に潜められた「雅」文学である。

庭鐘の取り上げた話「莊子休鼓盆成大道」、「兪伯牙摔琴謝知音」、「閻陰司司馬貌断獄」、「裴晉公義還原配」、「王安石三難蘇学士」、「三現身包龍圖断冤」、「衆名妓春風弔柳七」の主人公は全て文人であり、しかも、話の時代は春秋戦国時代が二篇、唐の時代が一篇、漢の時代が一篇、宋の時代が四篇となっている。明代に取材した話の一つも取っていない。

尾形侑氏が都賀庭鐘の「三言」についての受容を以下のように述べている¹⁸⁾。

当代の庶民の意識に立って当代庶民の生活を描いたところに特色のある「三言二拍」の中から、「閻陰司司馬貌断獄」や「王安石三難蘇学士」などの歴史や政治にかかわりの深い話を選んで、(中略)そこには中国白話文学の受容における一つの大きな屈折が考えなければならぬであろう。極端な言いかたをすれば、明人にとっては現代の庶民小説として創作されたものが、庭鐘においては士大夫の文学に近い性質を帯びた一種の歴史小説としてうけとめられたのだということになる。

尾形侑氏は都賀庭鐘が「三言」を一種の士大夫の歴史小説として受け止めて

いたと言っている。

「三言」の中から、前の「二言」だけより素材を選び、『醒世恒言』を避けた理由は、『醒世恒言』は前の「二言」と違い、「雅」の話が少なく、「俗」の話が圧倒的に多かったためである。文人意識の高かった彼は「三言」の中にある「雅」なる話と「俗」なる話をきちんと弁え、素材を選んだのであった。

彼が「薄情」の話を選択し、一途な普通の女性や、仲よき夫婦の話を選んだのは彼の特異な女性観、夫婦観によるものであり、文人の出てきた話を選んだのは歴史や政治へ寄せる関心などによるものであると思われる。『醒世恒言』の中には、彼らのこれらの創作意識に相応しい素材が殆ど見られなかったのである。

[注]

- ①魯迅『中国小説史略』上海古籍出版社 1998年1月
- ②日野龍夫『近世文学史』日野龍夫著作集第三巻 ベリかん社 2005年11月 573頁
- ③中村幸彦『中村幸彦著述集』第七巻 中央公論社 1984年3月
- ④大庭脩『関西大学東西学術研究所資料集刊七 宮内庁・書陵部蔵 舶載書目 附解題』1972年1月
- ⑤③に同じ。
- ⑥①に同じ。
- ⑦孫楷第『中国通俗小説書目』115頁 作家出版社 1957年
- ⑧ここでいう英雄男女の意味は、孫楷第氏の言っている『水滸伝』の中のような英雄人物とは違い、武器を持たずに知恵で戦う人や、精神力の強い人のことを言う。憑夢龍はこれらの人に対して、賛美の態度を持っているゆえ、ここで「英雄男女」という言葉を使用する。
- ⑨①に同じ。
- ⑩凌夢初『初刻拍案驚奇』上海古典文学出版社 1957年
- ⑪Patrick Hannan『The Chinese Vernacular Story』Harvard University Press 1981年
- ⑫劉潔秋「中国「短編白話小説」と江戸「読本」の比較研究——『三言』と『英草紙』を中心に——」『季刊日本思想史』36 1990年11月
- ⑬中村幸彦『中村幸彦著述集』第11巻 中央公論社 1982年10月
- ⑭徳田武『日本近世小説と中国小説』第二部第一章「『英草紙』と三言——俗に即して雅を為す——」青裳堂書店 1987年5月
- ⑮尾形尙『中国白話小説と『英草紙』』『文学』34-3 1966年3月
- ⑯⑫に同じ 劉傑秋氏はこの一篇を音楽論に基づく政治論としている。
- ⑰中村幸彦『新編日本古典文学全集』小学館 1995年11月
- ⑱⑮に同じ。

参考文献

日本語

- 小川陽一『三言二拍本事論考集成』新典社 1981年11月
岡白駒 沢田一斎 施訓『小説三言』尾形仿解説 ゆまに書房 1976年4月
中村幸彦編『近世白話小説翻訳集』第二巻 日野龍夫解題 汲古書院 1984年11月
中村幸彦編『近世白話小説翻訳集』第四巻 徳田武 解題 汲古書院 1985年3月
中村幸彦編『近世白話小説翻訳集』第五巻 長澤孝三 解題 汲古書院 1985年6月

中国語

- 繆詠禾『憑夢龍和三言』遼寧教育出版社 1992年10月
王鴻泰『「三言二拍」的精神史研究』台湾大学出版 中華民國83年6月
張兵『凌夢初和兩拍』遼寧教育出版社 1992年10月
程国賦『三言二拍伝播研究』中国社会科学出版社 2006年12月

* 討議要旨

小曾戸明子氏は、19世紀に出版された一般的書物と『英草紙』とでは、女性観・夫婦観に隔たりがあるのではないかと質問し、発表者は、都賀庭鐘の女性観については今後検討すると回答した。大高洋司氏が、都賀庭鐘の文人性に反して、翻訳した中国白話小説に俗な部分（俗性）が多くみられることから、彼の翻案姿勢をどのように考えるべきかと問い、発表者は、『喻世明言』、『警世通言』では明代の庶民の生活がよく反映されているため、俗な部分が多々みられるが、庭鐘は作品を読む視点が他者と異なっており、両作中でも文人性が強くみられる部分が翻訳によく表れているので、そこに庭鐘の文人性がよく表れていると応答した。